

表紙の人

歌い続けたい感動する歌を!! 仲の良い6人組が歌を『ギフト』

アカペラバンド 『GIFT』

滝澤学さん（法学部4年）
平瀬真行さん（法学部3年）
馬場康平さん（経済学部3年）
山柊義弘さん（総合政策学部4年）
寺澤慧さん（商学部4年）
池田勇樹さん（法学部4年）



フジテレビ「ハモネプ全国大会」出場
テロップに「中大イケメンバラード」

テレビから流れてきた歌声に惹きつけられた。見ると、「中大イケメンバラード」というテロップの下で6人の男性がMISIAのeverythingを歌っていた。女性の歌を男性が歌っているのど、甘い歌声が印象的だった。出演タレントも皆そろってうっとり顔だ。

9月18日夜、フジテレビの人気番組「ハモネプ

全国大会」。出場したのは『GIFT』。中央大学アカペラサークル「Do it your voice」に属する男性6人組のバンドである。5年ぶりに「カスペ!」の中で復活したアカペラオーディション「ハモネプ」。『GIFT』は全国一斉オーディションで620組中の15組に選ばれ、全国大会への出場を果たしたのだ。



一昨年の12月に結成した『GIFT』。取材で対面して、6人があまりにも気さくで驚いた。テ

レビの中で歌う彼らとは違った顔。学年はバラバラだが皆がそれぞれ自然体で、そんな空気が6人の仲の良さを伺わせた。

「Do it your voice」は、ライブがあることにバンドを結成するので、『GIFT』のように1年半以上続いているバンドも珍しいという。「6人で続けたいという気持ちを皆が持っているから続くんですよ」と揃って話す。





きつかけはさまざま 気の合う6人が出会う

「アカペラの道」へのきつかけはさまざまだ。楽譜を作る滝澤学さん（愛称「たつきー」 法4年）は高校生の頃に「ハモネプ」に影響され合唱部へ。とても落ち着いている、というのが第一印象。ところが、11月の「白門祭」で彼はハイソックスにスカート姿で女子高生になりきっていた。オチャメな一面をみせられたときには驚いた。

リーダーの平瀬真行さん（「らっせー」 法3年）は、音楽好きなお父さんから中学1年の頃にもらった洋楽のCDに影響された。「高校ではバトミントン部だったんですけど、文化祭ではケミストリーを歌ったりしました」。

パーカッション担当は馬場康平さん（「こーへー」 法3年）。「オレは大学の新歓でこのサークルを見に来たのがきっかけ。オールラウンドサークルにも入っているんだけど、それとは別に何か目標あることをしたくて」。

冒頭の「イケメンバラード」のテロップにあった「イケメン」こと山柊義弘さん（「ます」 総政4年）も、中学生のころからギターの弾き語りをしていた。大学ではテニスサークルとかけもちをしていたが、「テニスはもういいかなって思っただけで、歌を極めていけるアカペラを選びました」。寺澤慧さん（「でんぞう」 商4年）と池田勇樹さん（「でんぞう」 法4年）は、同じ中大附属高校卒で、高校時代に一緒に「大学に入ったら世界をとろうぜ！」と夢見ていた。音楽が好きだった2人はアカペラを選んだ。そしてこのふたりの目標が現実になり、全国大会出場へとつながった。

とりあえず申し込んだハモネプ 「君たちいいね」とプロデューサー

しかし「ハモネプ全国大会」への出場は、初めからやる気たつぶり！・・・なわけではなかった。でんぞう 「最初、ハモネプが復活するって話を聞いて僕がメンバーにメールをしたんですけど・・・なんと全員スルーですよ」

てら 「最初はね、何言っただって感じだったよ（笑）」

その後、サークルにも番組から連絡があり、「と



りあえずやってみるか」と申し込んだ。すると大
学に事前撮影をしにスタッフがやってきた。

ます 「びっくりしたよね。エントリーシート
みたいなものも書かされてさ」

それでも6人は、緊張もせずに気楽に予選へ参
加した。SMAPの『らいおんハート』を歌い終

わると、番組プロデューサーに「君たちいいね。
もう1曲歌ってよ」と褒められてしまった。帰りの
マックで「俺ら、ヤバイよ!」と急にスイッチ
が入った。しかし……。

らっせー 「それから一週間連絡が来なかった
んですよ」

もうだめかな、と思っていたときに電話が鳴つ
た。「もう一度撮影をさせてほしい」と次の日に
スタッフが大学に来た。そして、その翌日によ
うく通過の連絡が来た。

らっせー 「確か昼飯を食べてるとき!」

こーへー 「試験中だよ!次の時間が試験でさ、
オレ興奮してそれどころじゃなかったんだ!」

「悔しかった」予選落ち ADとディレクターに歌でお礼

担当のADは、「ほのぼのしている」と『G
IFT』を気に入ってくれた。『ディレクターの
方もとてもよくしてくれたんですよ。テレビ局の
会議で僕らを推してくれたりして』という。『G
IFT』はハモネプのためのバンドではない。以

前からライブハウスでも歌ってきた。だから、6
人にはとくに番組のために「つくっている」とい
う自覚はなかった。

本番。決勝へは進めなかった。「悔しかった」
と口を揃える。しかし、彼らは担当ADとディレ
クターへの感謝の気持ちでいっぱいだった。

てら 「予選落ちしちやっただけど、ADとディ



レクター2人だけのためにホールのすみのほうでプレゼントと共に歌を贈りました」

横原敬之の『僕が一番欲しかったもの』。決勝で歌うはずだった。歌いながら、みんな号泣してしまった。ADとディレクターも涙を流していた。彼らの素直な気持ち、しっかり伝わったのだろう。その後、2人は8月の『GIFF』のライブにも揃って見に来てくれた。

自信につながったテレビ出演 「仲間の大切さを教わる」

ます 「GIFFとしてテレビに出られたこと、その反響が嬉しかった。ホームページの書き込みなどでも、〝癒された〟とか〝元気になった〟って言ってくれる人たちがいて。こうやって周りに評価してもらえたことが、自分たちの自信につながりました」

でんぞう 「世界を目指そうって言っていたことを、ハモネプで実現できたのが本当に嬉しかった」



てら 「GIFFとして、学内だけじゃなく広い世界で歌わせてもらったことが貴重な経験」
たつきー 「気の合う仲間と歌えることが楽し

くて仕方ない。初めは俺らもうまく歌えなかった。練習を重ねて初めて声が合い、背中がビリビリとする瞬間がたまらないですよ」

らっせー 「まさに努力の賜物だよ。俺は、GIFFには、仲間の大切さを教わりました」

こーへー 「チームとしても個人としても、真剣にひとつの目標に向かって打ち込めた。GIFFはかけがえのないチーム。ここにいられたことに本当に感謝しています」

本当にこのバンドを大好きな気持ちで6人分までとまって、真っ直ぐに伝わってきた。

ハモネプに出場したことで6人は視聴者に、テレビ局スタッフに、そして自分たちに大きな「GIFF」を残した。

そんな『GIFF』の活動も4年生が卒業する来年で休止。「それまでは、誰かが感動するような歌を歌い続けていきたい」とらっせー。「誰かいいんだよね」「皆じゃなくてもいい」と6人で頷く。インタビュー後、爽やかな風が胸をよぎった。

「白門祭」でも、その歌声でステージにいる客を魅了していた。

(学生記者 山崎綾香 II 法学部3年)